2024年4月7日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

イエスの「感謝」に与る

［コリントの信徒への手紙一1章10～18節］

「さて、兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの名によってあなたがたに勧告します。皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心を一つにし思いを一つにして、固く結び合いなさい。わたしの兄弟たち、実はあなたがたの間に争いがあると、クロエの家の人たちから知らされました。あなたがたはめいめい、「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケファに」「わたしはキリストに」などと言い合っているとのことです。キリストは幾つにも分けられてしまったのですか。パウロがあなたがたのために十字架につけられたのですか。あなたがたはパウロの名によって洗礼を受けたのですか。クリスポとガイオ以外に、あなたがたのだれにも洗礼を授けなかったことを、わたしは神に感謝しています。だから、わたしの名によって洗礼を受けたなどと、だれも言えないはずです。もっとも、ステファナの家の人たちにも洗礼を授けましたが、それ以外はだれにも授けた覚えはありません。なぜなら、キリストがわたしを遣わされたのは、洗礼を授けるためではなく、福音を告げ知らせるためであり、しかも、キリストの十字架がむなしいものになってしまわぬように、言葉の知恵によらないで告げ知らせるためだからです。十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。 」

[1]　「感謝」を掘り下げて行きたい

 4月最初の日曜日を迎えました。新しい年度もご一緒に教会生活が出来ますことを嬉しく思っています。過ぐる一年間も、この拙い者のためにお祈り下さり、感謝しています。新しい年度もお祈りを宜しくお願い致します。明るい気持ちでご一緒に前に進ませて頂けたらと思っています。

　昨年度の教会の聖句を覚えておられるでしょうか？このイエス様の言葉です。「シモン、シモン、わたしはあなたのために、信仰がなくならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」（ルカ22:32）。…新型コロナというこれまで通ったことのなかったトンネルを教会は経験させられました。でも、その中でもイエス様は、この御言葉通りに、私たちのためにお祈り下さり、私たちが信仰をなくすことがないように、私たちのことを捕らえていて下さったことを思います。確かに試練でしたし、それはまだ続いているとも言えるわけですけれども、試練を経験したからこそ、私たちは礼拝出来る事の有難さを実感したと思いますし、信仰が与えられていること自体がどんなに幸いなことかを改めて知らされた、ということがあったのではないでしょうか。そしてそれを経験した者たちは、自ずと周りの者たちを励ましているのだと思います。昨年度のその聖句に続いて、今年度は 第一テサロニケの5章16～18節を掲げさせて頂きました。皆さんの中にはこの御言葉をお若い時から愛唱している方もいらっしゃるかもしれません。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです」。―「喜び」「祈り」「感謝」と、三つのことを言われていて、テンポも良いので覚えやすい。でも改めてこの言葉の奥行は深いなあ、と思わされています。「いつも」です。「絶えず」です。「どんなことにも」です。「気が向いたときに」とか「暮らしが順調な時に」ではないのですね。むしろそうではない時にも、あなたの心は喜んでいられるか。そんな時こそ神様に聴こうとする・御言葉にたずねる祈りをしているか、がっかりしてしまうような出来事に出会ってしまうような時にも「感謝」を見つけることが出来るか。…これはある意味、神様からのチャレンジだと思います。しかもパウロははこう続けるのです。―「これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです」。「喜び」「祈り」「感謝」、このことこそ神様があなた方に望んでおられることなのだと。キリストに在る者は、その生活が出来る。また、そのように導いて下さるのもイエス様であり、聖霊なのだと思います。それをご一緒に求めて行きたいと思うのです。

私はこの所、「教会とは何なのか」ということをとても考えさせられています。例えば皆さんが「教会」に求めているものは何ですか？それはきっと第一に「神様の御言葉」ということだろうと思うのですね。御言葉に与ること。しかし御言葉を慕い求めるというのはクリスチャンになる迄は良く分からないことだと思うのです。私がそうでした。それ迄は人との交わりを求めることの方が教会に行く大きな動機だった時がありましたね。それも悪いことではないと思います。けれどもそれだけだったら教会は殆ど「社交場」です。現代の教会は、欧米でも急激に社交場としての性格は薄くなってきています。当たり前の様に教会に行くという人たちは減ってきています。それはこれまでの「教会の運営」を継続していくという点では危機的なことなのですけれども、本来教会とは何なのかということをもう一度考えて行くための機会を神様は与えて下さっているのではないかと思うのです。コロナもその意味では、ある意味「ぼーっとしてんじゃないよ」と、私たちを考えさせ、祈らせる機会になっているのではないかと思います。私たちの「喜び」、私たちの「感謝」、それを掘り下げて行きたいと思うのです。

[2] 「救い」の原点に立ち帰れ

 今日からご一緒に味わって行く「コリントの信徒への手紙一、二」も、使徒パウロの手紙です。パウロが伝道の旅に出ている中、自分が創設に関わったコリントにある教会の交わりの中に良からぬ事が起こっているという事を聞いたんですね。それは一つは「分派争い」だったということです。11節以下にこうあります。「わたしの兄弟たち、実はあなたがたの間に争いがあると、クロエの家の人たちから知らされました。あなたがたはめいめい、「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケファに」「わたしはキリストに」などと言い合っているとのことです。キリストは幾つにも分けられてしまったのですか。パウロがあなたがたのために十字架につけられたのですか。あなたがたはパウロの名によってバプテスマを受けたのですか。」

「誰々につく」と。人間ってこうなり易いのだなあと思います。人を尊敬すること自体は悪いことではないですよね。そして牧師先生に対しても、私はあの先生はいいと思うけれども、あの先生はちょっとね、ということは正直あると思いますし、ある意味それは仕方がないことだと思います。ただ、牧師も教会組織のリーダーも、当然ですが「人」です。神様が用いている人ですけれども、神様じゃないのです。だからパウロは言っていますよね。「私はパウロ先生からバプテスマを受けた」などと誇っている者については、「あなたがたはパウロの名によってバプテスマを受けたのですか」と反問しています。バプテスマは主の御名によるものであるし、自分自身は「クリスポとガイオ以外に、あなたがたのだれにもバプテスマを授けなかったことを、わたしは神に感謝しています」と言っている程、彼はそんなことを誇りにしていない。まして分派争いをしていて一致が出来なくなっている教会に対して「キリストは幾つにも分けられてしまったのですか」、そんなバカなことはないでしょう、と、むしろ裁き合いになってしまうような交わりの現実を知って、「救い」の原点に立ち返らせようとするのです。それは、主が私たちのためにその命を献げて下さった、あの主イエスの十字架という一点です。

パウロは言います。「なぜなら、キリストがわたしを遣わされたのは、バプテスマを授けるためではなく、福音を告げ知らせるためであり、しかも、キリストの十字架がむなしいものになってしまわぬように、言葉の知恵によらないで告げ知らせるためだからです。十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。」　あなた方が立ち返る所は、ただ十字架という原点だ。私でもアポロでもケファ（ペトロ）でもない、人間が出来ない神様との和解をあの方はやってくれたのだ、私たちは皆、あの主イエスによって救われたお互いではないか、教会の交わりの原点はどこまでも十字架でしょう、と言っているのですね。

[3] パウロの感謝に先立つ大きな「感謝」

　ところで、パウロがこの手紙を書き始めた時、「感謝」から始めているというのはとても大事な事を語ってくれているように思うのです。それこそ「どんなことにも感謝しなさい」です。“あなた方がキリスト・イエスによって神の恵みを受けているということを聞くと、もう感謝しかない！”ということを4節で語っていますし、その後“主は、最後まであなたがを支えて、主の再臨の日には、非のうちどころのない者にして下さいます”と、言い切っていますよね。なんでそんな励ましと感謝が出来るのでしょうか？―それは、パウロの感謝に先立つ「感謝」があるからだと思います。

コリントの信徒への手紙一11:23以下で、パウロは主イエスのあの「主の晩餐」の制定文としてこう記しているのですね。「主イエスは引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りを捧げそれを裂き…」と。主イエスが十字架に架けられる前日の食卓です。その時、主は 「感謝して」パンを裂いたのです。これは、ご自分が食するための感謝ではないですね。すべての人々の救いとなるために、この食卓が開かれていることを感謝している。ご自分の体を献げることを念頭に置いて感謝しているのです。私たちへの救いが実現することに向かう「感謝」です。だからパウロも今、問題だらけの教会の現実を見捨てることなく、感謝が出来るのです。教会という交わりは、自然発生的でなく御子の尊い血が注がれているのですね。

　私たちが「教会」に連ならせて頂いているということは、本当に奇跡的なことです。私たちは天の食卓を、主イエスを中心にした喜びの交わりを既に頂いている。そこにまた新しい方々も喜んで迎えて行きたいですね。感謝を持って。

20世紀最大の神学者・牧師の一人、D・ボンヘッファーの『共に生きる生活』の中から一部を読んでお祈り致します。「我々は、大きなものが与えられるようにと祈りながら、日ごとの小さな （それは本当は決して小さくはない！）賜物に感謝することを忘れている。しかし、小さなものをも感謝して神のみ手から受けようとしない者に、神はどうして大きなものを委託することができるだろうか。（牧師に対しての言葉）…牧師は、自分の教会の会員について不平を言ってはいけない。ほかの人たちの前では絶対に言うべきではないが、神の前においてもそうすべきではない。牧師は、神と人との前で教会の非難者となるために、一つの教会がその牧師に委ねられたのではない。…我々には弱くつまらなく見えるものも、神の目には大きく、栄光に満ちているものかも知れない。…我々に与えられているものを、日々に感謝して受ければ受けるほど、いよいよ確かに交わりは、日々神のみこころにかなって、成長するのである」。

愛する主よ、あなたの十字架が私たちすべてを覆っていることを悟らせてください。どうか私たちをあなたの愛で砕いて下さり、どんな中にも、感謝を見つけることが出来る交わりであり続けることが出来ますように。お一人びとりをあなたの器として祝福して下さい。そして、互いのために祈り合うことが出来ますように。主の御名によって祈ります。アーメン。